

學大科法學大國帝都京

# 叢論濟經

號一第 卷三第

論說

資本ノ概念

資本金子稅設定ノ氣運

支那近代ノ戸口ニ就テ(一)

續正貨蓄積論

戸田博士ノ不換紙幣論ヲ讀ミテ

保險本質論(二)

雜錄

經濟雜話第四

聯合諸國輸出入禁制ノ我國ニ及水  
ス影響ニ就テ

對露輸出品代金ノ支拂決濟ニ就  
キテ

經濟戰爭ト我貿易上ノ利害

現前ノ大戰爭ニ就テノ感想

乳兒死亡率ト出生率トノ關係

らダレ一「みる」學說ノ研究(二)

本多利明ノ經濟說ニ關シ本庄學  
士ノ教ヲ乞フ

米國ニ於ケル移民教育機關

補習教育義務ノ可否

法學博士 河上肇

法學博士 神戶正雄

文學博士 內藤虎次郎

法學博士 小川郷太郎

法學博士 福田德三

法學士 小島昌太郎

法學博士 田島錦治

法學博士 戸田海市

法學博士 神戶正雄

法學士 河田嗣郎

法學士 米田庄太郎

文學士 高田保馬

商學士 大塚金之助

法學博士 福田德三

法學士 山本美越乃

法學士 財部靜治

禁

轉

載

大正五年七月一日發行

## 補習教育義務ノ可否

財部 靜治

一、帝國教育會主催ニ係ル第六回全國小學校長大會ハ本年五月七日ノ會議ニ際シテ文部省諮問案ニ對スル決議ノ一項中「尋常小學校卒業者ニシテ上級ノ學校ニ進マサル者ニハ二ヶ年ノ補習教育ヲ義務教育トシテ課スル事」ヲ決定シ他ノ一項ニヨリ「尋常小學校ノ教科ヲ終リタル男子ニ滿二十歳迄ノ間ニ於テ補習科又ハ實業補習學校ノ教育ヲ二ヶ年間義務教育トシテ課スル規定ヲ其筋ニ建議スル事」ヲ決セリトイフ吾人ハ「教育學及教育行政ニ就キテハ門外漢タリ學制上ノカカル重大問題ニ對シ妄リニ容喙スルカ如キハ慎ムノ要アルヤヲ知ラスト雖モ往々ニシテ其例アルカ如ク徒ラニ規定ノ統一完備、制度刷新ノ美名ニ驅ラレ社會上經濟上ニ於ケル實生活ノ必要否迷惑ヲ深ク究メスシテ此重大事件ヲ輕卒ニ決定スルノ虞ナシトセサルヲ以テ聊カ臆見否寧ロ所感ヲ吐露シテ識者ノ叱正ヲ乞ヒ又後日精

研ノ端緒ニ供スルコトトセリ。

二、教化ヲ助長シ知識ノ一般標準ヲ高ムル爲有力ナル一方便トシテ輓近國家ノ具有スルモノハ初等普通教育ニ於ケル就學義務制度ニシテ國家ハ其主旨ノ承認及貫徹ニヨリ國民ノ教化増福ニ勉ムヘキ大職分ノ一端ヲ盡ス而モ亦其精神ヲ一層擴張シ「尋常及高等小學校ニ於テ既脩セル學科ヲ溫習補脩」スルノ主旨ニ出ツル補習科并ニ「小學教育ノ補習ヲナスト共ニ各種ノ實業ニ從事スル者ニ簡易ナル方法ニヨリ其職業ニ要スル智識技藝ヲ授ケ」ントスル實業補習學校「職工タルニ必要ナル教科ヲ授ク」ヘキ徒弟學校否一般ニ初等實業學校ニ就キ就學ノ義務ヲ可トセスヤトハ小學教育ノ效果漸ク擧リ實際界ニ於テモ學校教育ノ重スヘキヲ認ムルニ及ヒ自然ニ起ルヘキ問題ナリ特ニ碩學すべんさ一カ夙ニ喝破セル如ク教化上化粧ヲ先ニシ着衣シテ防寒避暑スルノ目的ヲ後ニスルノ時代ヲ過キ實用ヲ先ニシテ虛飾ヲ避クルノ時代ニ進ムト共ニ小學校卒業生ト實際產業界トノ聯絡ヲ圓滑ナラシムヘキ前

1) 五月八日大阪毎日新聞記事參照

記諸教育機關ハ益々重セラルヘク從ヒテ又之カ  
 就學義務承認ノ可否問題モ重セラルルニ至ル。  
 曩ニ日清戰役ノ頃實業補習學校徒弟學校ニ關ス  
 ル規定ヲ制定シ次イテ日露戰爭ノ頃は等ノ規程  
 ニ改正ヲ加ヘ之カ振興ヲ謀レル我邦ハ先進諸國  
 ニ比肩スルノ域ニ進マントノ熱誠努力ニ驅ラレ  
 殖産興業ノ一助トシテ此策ニ出テタルノ趣ナシ  
 トセサルニ反シ近來強國ノ間ニ其存在ヲ認メラ  
 レ國民ノ間自主獨立ノ氣慨諸方面ニ活躍スルニ  
 至リ其間又各種實業補習學校ハ明治三二年末ニ  
 全國一四〇校ヲ數フルニ過キサリシモノ一四年  
 後ノ大正二年度ニハ七、六八七校ヲ數フルニ至リ、  
 徒弟學校モ亦同シ期間内ニ二〇校ヨリ一三校ニ  
 増セルノ事實ヲ示セ(小學校高等補習科明治三四年度二  
 四四タリシモノ大正二年度二二七ニ減シ尋常補習科ハ其減少一  
 層甚シク同期間内ニ一九四三ヨリ二四九ニ減セルハ教育ノ退  
 步ヲ意味セシテ寧ロ小學校以上ノ諸教育機關增加セルノ事實  
 ナ微表スト謂フヘシ)ルニ及ヒ義務補習教育承認問  
 題ヲ生セルハ自然ノ勢トモ議シ得ヘキ觀アリ又  
 海外ノ新制度ヲ盲奉スルノ嫌アリシ邦人カ今ヤ  
 漸ク是等新制度ニ對シ懷疑批判整理ノ態度ヲ以

テ臨ムニ至レルノ餘波ナリト議シ得ヘキモノナ  
 シトセス。而モ亦之ニツキテハ評論ノ餘地アリ  
 請フ少シク卑見開陳ノ歩ヲ進マシメヨ。

三、諸先進國輓近ノ趨勢ニヨルニ學界及實際  
 界共ニ補習教育ノ義務承認ヲ可トスルノ說重キ  
 ヲナセルニ似タリ特ニ商業界ニ於ケルカ如ク小  
 商人及商業使用人ノ階級カ無教育ノ分子他業ノ  
 失敗者ニヨリ侵入セラレ其階級ニ屬スル者過剩  
 ノ弊ヲ告ケントスル場合商業補習教育ノ義務承  
 認ハ意義アリ。試ミニ之ヲ獨逸ノ現況ニ察スル  
 ニ是等ノ問題解決ノ法律的根據ヲ營業條例中ニ  
 規定シ、補習學校就學ノ義務ニ關スル掟ト共ニ  
 雇主カ雇人ノ通學ニ就キ守ルヘキ義務ヲ詳シク  
 限定セリ乃チ就學義務ハ帝國立法トシテ之ヲ認  
 メサルモ支分國立法上之ヲ承認シ得ヘキ權能ヲ  
 授ケ支分國此權能ヲ行使セサル所ニテハ地方自  
 治體又ハ自治體組合ハ其條例ニヨリ之ヲ規定シ  
 得ヘキモノトセリ(支分國中普通補習學校ニツキ凡ニ之  
 ナ承認スルモノトシタ(一八七二年來) 德國(一八七三年來) 巴  
 丁、(ヘッセン) だるむすたつさ、わいまい、こぶるぐ(一八七四年

2) 第三十四統計年鑑 PP. 558, 559.  
 3) 同上 p. 557  
 4) 同上 p. 536

來(まい)にんげん、しゆわるつぶらぐ・るしごるすたつこ(一八七五年來)しゆわるつぶらぐ・ぞんでるはうせん(一八七六年來)等アリ其外巴威里、バウうゆるてむべるひ等後ニ至リテ之ヲ認メタルモノアリ) 程度一層高キ實業學校ニツキテハ之ニ入學スルト否ト飽迄各個人ノ任意又ハ熱心ニ放任スルコト至當ナルニ反シ補習學校ハ小學教育ヲ補フト共ニ各種職業ニ關スル初步從ヒテ產業ニ從事スヘキ各人ニ必要ナル知識藝能ヲ授クト考フレハナリ其成績上就學義務ノ有效ナルヲ實證セルモノアルノミナラス是等ノ學校未タ充分ニ發達セス自然ノ成行ニ任セテハ學生ヲ吸引スルノ力ナキ所自ラ右就學義務ノ承認ニヨリ學校ノ普及ヲ圖ルヲ可トストモ考ヘ得ヘク近年ニ至ル迄全國ニ亘リ此義務承認ノ可否ヲ問題トセサリシ普漏西ノ如キ自ラ地方條例ニヨル承認ヲ必要トセル事情アリシナラン。而モ亦議スル者或ハ曰ク實業補習學校ノ就學ヲ任意ナラシムルトキハ禾穀ヲ其稗ト選リ分クヘク教課上空シキ藁モ亦等シク打禾セラレ教師及生徒ノ時空シク濫費セラルルノ弊ナキヲ得ヘシト事實上就學義務ノタメニ學校ハ充分ナル生徒員數ヲ收容シ得ヘ

キモ一面ニハ其成績ヲ不良ナラシメ易キノ弊アリ學校トシテハ白ラ其成績ヲ譽ケ名聲ヲ高メテ之ヲ盛大ナラシムルニ勉ムルノ必要失ハレ又生徒トシテハ有望ナルモ無能ナルモ一樣ニ收容セラルルコトトナルヲ以テ其教育標準ヲ低下セシメ有爲ノ青年ハ其進歩ヲ阻害セラルルコトトナルヘキヲ以テナリ獨逸ノ經驗ニヨルニ義務強制ヲ伴ヘル諸學校ニ於テ其強制ヲ止メシト共ニ習練進歩其面目ヲ一新セルノ例アリうゆるてむべるぐニテ市町村役所ノ善意ナカラ熟慮ヲ伴ハサル熱誠ノタメ又無能ナル教師ノ催促急ナリシタメ就學義務ヲ保持セルヨリ最モ不良ノ結果ヲ來セルノ例アリトセラル又獨逸帝國ニ於テ商家ノ丁稚ニツキ商業補習學校就學ノ義務ヲ地方條例ニヨリ定ムルノ可能ヲ缺ケル期間(帝國營業條例第一五四條一八七八年六月一七日ノ修正、一八八一—一九〇年)中七九ノ商業補習學校設立サレシモ其以前ニ右ノ可能アリシ間(一八七一—一八〇年)ハ僅カニ三五校設立サレタルノ事實ヲ擧ケテ強制ノ效果薄キヲ舉證スルノ一材料ニ供セルアリ惟フニ右ノ相違ハ

義務制ノ有無ニヨリテノミ生セシ結果タラスシテ時勢ノ一般變遷ニヨルモノ多カルヘク現ニ帝國營業條例第一二〇條一八九一年六月一日ノ修正ニヨリ前記ノ如ク就學義務承認ノ可能ヲ再興セルヨリ補習學校ノ發達著シキヲ見テモ之ヲ明カニスト謂フ可シ。要スルニ補習學校ノ實績擧ラス其必要公衆ニ承認サレズンハ義務制ノ規定アルモ死法ニ歸スヘク又義務制ノタメニ却リテ學校ノ成績ヲ不良ナラシムルコトアルヘク其半面ニ於テ教育及產業勃興ノ機運ニ際會シ學校ノ效果佳良ナルコト承認セラレ有爲ニシテ努力心ニ富メル子弟間ニ智能ヲ擴ゲントスルノ欲求湧カハ就學義務ノ名ナキモ克ク其實ハ擧カラン。

四、本邦今ヤ諸方面ノ教育問題世人ニヨリ注目セラレ小學校教育ニ就キテモ亦前記ノ會議ハ特ニ注目スヘキ事項如何トノ文部省諮問ニ對シ五月八日決議ノ一項中ニ「速カニ義務教育ヲ延長シ八箇年トス」ヘキコトヲ決セルト共ニ其以前ニ補習教育ノ義務制採用ヲ決議セルハ前記ノ如シ之ヲ我邦實際生活ニ照シテ考フルニ幼少年

保護ノ方法ヲ講スヘキ工場法ハ近日實施セラレントシテ實施確實ナリト安シ得サル事情アリ之カ實施ヲ見ルヘシトスルモ其規定中ニハ特殊工場ニ於ケル一五歳未滿者ノ就業時間制限及夜業禁止ヲ本法施行後一五年ニ至リテ初メテ施行セントスルカ如キ幼稚ナルモノアリ徒弟ノ補習學校就學ニ關シ工場主ノ負フヘキ義務ニツキテハ何等ノ規定ナシ又丁稚保護ヲ目的トスル一般法規モ存セサルニ一面ニハ義務學齡中ニアル者ノ就學比必スシモ理想ノ如クナラス其學齡中ニアリ乍ラ一身一家ノ事情ニ餘儀ナクセラレ仕事場工場商店ニ走り否之ニ逐込マルル者モ尠カラス又地方農村中設立維持ノ義務アル小學校教育費ノタメニ全經費ノ六割乃至七割ニ達シ之カタメニ財政上困レルカタメニタトヒ實業教育費國庫補助法ノ補助アリトスルモ進ミテ補習教育ノ整備ヲ望ミ兼ヌルモノナシトセス凡リ是等ノ事情ヲ綜合シテ考フルニ我邦ニ於テ即時ニ全國劃一ノ補助教育義務制ヲ布クモ其實ヲ擧ゲ得ヘシトハ保證シ難キニ似タリ漸ク以テ進ムノ方針ニ

ヨリ義務ヲ原則トシツツ特例ヲ認ムルコト多キ  
 モ一方法ナルヘシト雖モ其特例ニ依ルモノ多カ  
 ルヘク豫想サレナハ其實ナキ義務制ヲ始メヨリ  
 認メサルニ如カス。サレハ右義務制ノ承認ヲ府  
 縣令又ハ市町村條例ニ委任シ斟酌ノ自由アラシ  
 ムルコト寧ロ適切ナラサルヤ研究ノ餘地アルト  
 共ニ現今高等小學校ノ教育益々實際的ノラント  
 シ其教科目中ニ手工、農業、商業ノ一科目又ハ  
 數科目ヲ加ヘ、土地ノ狀況ニ鑑ミテ斟酌ノ餘地  
 ヲ多カラシメ産業ノ基本的教養ニ當ラシメント  
 スルノ運動及試験の施設 (一例トシテ本年四月ヨリ内  
 國商業ノ學級、海外商業ノ學級、生産事業ノ學級、上級志望ノ學  
 級ヲ設ケシ大阪育英高等小學校ヲ舉グ<sup>6)</sup>)ヲ見ルニ至レル  
 ヲ以テ考フレハ小學校義務教育年限ハ八ケ年ニ  
 延長スル代リニ尋常小學校卒業後其他ノ學校ニ  
 進マサル者ニ高等小學校通學ノ義務ヲ原則トシ  
 テ認ムルモ一策タルヘシ少年實業志望者又ハ其  
 保護者ニシテ滿一四歲迄就學ノ義務アルヲ知り  
 又實業補習學校職工徒弟學校等ニ入學スルトキ  
 ハ此義務ヲ免除サルヘキコトヲ知レリトセンカ

後日職業ノタメ有益ナルヘキ是等學校ヲ進ンテ  
 選定スルコトナリ是等ノ學校振作ノ刺戟トモ  
 ナリ又強制存スルト共ニ任意就學ノ長所ヲ收メ  
 得ヘキ望アレハナリ。

五、牽牛花ヲ栽培スル者ハ狂ヒ咲ヲ作り人ヲ  
 シラ愛玩セシムルノ技倆ヲ有ス狂ヒ咲ト言ヘル  
 ハ狂ヘル花ノ意タラスシテ個性ノ發揮暢達非凡  
 ナルカタメニ人ノ驚嘆ヲ惹クコト著シキカタメ  
 ナリ上ハ幼稚園ヨリ下ハ大學院ニ至ル迄之カ教  
 育指導ノ任ニアル者ハ同様ニ又「人物ノ狂ヒ  
 咲」ヲ育成スルノ技倆ヲ修養スヘキナリ此主旨  
 ヲリセハ劃一又ハ強制ハ寧ロ厭フヘク本邦教育  
 制度中「範圍カ廣クテ自由ナ」ルヲ其特色トセ  
 ル補習教育ニアリテハ特ニ然リ世界ヲ指導セル  
 英米技手職人ハ學校ノ教ヲ受ケスシテ仕事場ニ  
 養成サルトスル英國傳來ノ思想ニモ亦味フヘキ  
 眞理アルヲ信スト雖モ一旦歐洲大陸ノ學制ヲ容  
 レタル我邦現況ニアリテハ白ラ之カ長所ヲ發揮  
 スルニ勉ムルノ要アリ予輩曩ニ獨逸ヲ捨テ英京  
 ニ入り修學期ニアル少年ニシテ新聞賣子タリ路

6) 五月十三日大阪朝日新聞記事參照。尙前出大阪毎日新聞記事參照

7) 澤柳政太郎氏著「我國教育」三五頁參照

頭ニ「バイバー」ヲ叫フ者多キヲ見獨逸ト異ルモ  
 ノ多キヲ感シ私カニ同盟國ノタメニ初等實業教  
 育制度整ハサルヲ惜メルコトアリキ獨逸ノ隆昌  
 ハ畜ニ學術技藝ノ優秀ニノミ歸スヘカラスシテ  
 其學藝民衆ノ間ニ普及シ俗化セラレ停車場ニ少  
 年新聞賣ヲオカサルノ用意調ヘルカタメナリ此  
 意味ニ於テ我國補習教育ヲ振作スルハ産業振興  
 ノ一根本策タルヲ信スル者ナリト雖モ之カ一般  
 就學義務制定ニツキテハ其效果疑ハルト考フ實  
 績ヲ擧クルカタメニハ各地學校ト實際界トノ接  
 觸利害關係ヲ一層密接ナラシメ實際家及其諸團  
 體ノ學校ニ對スル興味ヲ喚起シテ直接間接ニ之  
 カ振興ヲ助クシムルコト最モ必要ナルヘク又世  
 ノ先覺者ヲ以テ任スル者人品佳良ト一應推定ス  
 ヘキモ少數ナル分子ニ關係アル大學令案ノタメ  
 ニハ優悠數ケ年ヲ費ヤスモ厭ハサルカ如キ態度  
 ヲ守リ程度低キモ學生ハ衆多ナルヘク産業ノタ  
 メニハ重大ノ意義アルヘキ補習教育上ノ大問題  
 ニ付テハ朝ニ之ヲ議事ニ付シ正午ニ之ヲ議了シ  
 去ルカ如キ輕佻ノ措置ナカラシコトヲ切望ス

雜錄 補習教育義務ノ可否

まるさす記念號訂正  
 まるさす先生略傳

頁	行	誤	正
四	一	「有名ナル著書」チ	「有名ナル書」ト改ム
四	二	「公ニシ」チ	「著ハシ」ト改メ
二〇	其ノ次ギニ左ノ割註ヲ加フ。		
二〇	「其ノ刊行セラレタルハ、著者ノ歿後、佛國革命曆第 三年ニ在リ、Convention nationaleニ於テ其ノ刊行 配布ニ關スル議事アリシハ、13 Germinal, An III, 即チ耶穌紀元一七九五年四月二日ノコトニ係ル。」		
二〇	五	「えむぶずん」フ次ニ	「モ」チ脱ス
二二	五	なつた	なつた
頁	行	誤	正
三五	一四	之ニ一年後レテ	同シ頃一七九三年
三五	一五	こんじるせーノ	こんじるせーガ
三五	一五	か公ニサレタカ	ナル書ヲ草シ
頁	行	誤	正
三	六	發明セラレ居ル	發明セラレテ居ル
四	八	増加スル所ノ資本 増加ニ	増加スル所ノ資本ニ 増加ニ
五	七	うえすりつひ	うえすとりつひ
七	下ノ註	Rutgers	Rutgers

第三卷 (第一號一四七) 一四七

8) 本文校正ノ少シ以前ニ入手セシ昨年十月文部省専門學務局抄譯刊行「英國ヨリ見  
 タル獨逸ノ實業補習教育」ハ恰モ亦開卷第一ニ此事實ヲ學ケタリ吾人ノ感想  
 ミニ止マラサルヲ知ルベシ

七	行ハルコト	行ハルコト
一七	Fruits	Fruits
八	いーぶ	いーぶ
一八	養育タル	養育スル
二〇	まろさうす主義	まろさうす主義
頁	徳川時代ノ人口	正
一	相違候	相違候
二	漠然	漫然
五	臆當	標當
八	我故國備前	我故國備前
一四	一年間ノ口率	一年間ノ増加率
一九	物質ノ供給	物質ノ供給
二〇	多數	多數
二四	口享	延享
頁	社會階級別ト出生率トノ關係	正
一〇	Leroy-Beaulien	Leroy-Beaulien
一六	其勢ヲ減セザル	其勢ヲ減セザル
二三	出生制限ニハズ	出生制限ニ貢ハズ
二八	出生率差異	出生率ノ差異
頁欄	書目	正
九下	Berlin, 1913.	Schnollers Jahrbuch, 1913
一〇上	Tonelli	Tonelli
一二下	Gegner Malthus	Gegner des Malthus.

二下	『くわーたりー』	『くわーたりー』
二〇	『れがゆう』	『れがゆう』
一六上	『くわーたりー』	『くわーたりー』
二八	『れがゆう』	『れがゆう』
二〇下	二二—四	
	Philosophy, 1833. Malthus...	Philosophy, 1833.
	an League, Malthusian League,	
	A) Tracts: The Principle...	A) Tracts: The Principle...
二七下	山下王宗節	山下宗節
二七下	同	同拾遺 同
二八下	一八ノ五七七	一八ノ五七八
二八下	二二ノ二〇四	二二ノ二一〇
二九上	神社ト人口	社寺ト人口
三四上	一八九八年佛國人口動態統集	二二七
	一八九八年佛國人口動態 統集	二二七
三七上	古今戸口考如蘭後篇	一四
	古今戸口考 如蘭後篇	一四
頁欄	行 誤	正
九下	小島貞雄	小栗貞雄
九下	Condorcet	Condorcet
	x x x x x	
	再版中ノ誤植(初版ノ誤植以外)	
	再版中「新まるさす主義」第八頁欄外ノ歐文ノ註ハ第五頁ノ欄外	
	ニ入ルベキモノ也	